

—松本のまちづくりのめざす姿—

美しく生きる。



健康寿命延伸都市・松本

市民一人ひとりが主体となって健康寿命を延伸し、
誰もが生きがいを持って暮らし続けることが可能な都市



松本市・文藝春秋共催
「健康寿命延伸都市・松本」地方創生シンポジウム

「美しく生きる」ために
いま私たちがすべきこと。

2015年10月20日、松本市まつもと市民芸術館で
開催された地方創生シンポジウム。

迫りくる「少子高齢型人口減少社会」に、
われわれはどのように対応すべきなのか。

800人近い来場者を前に、壇上では5名のパネリストによる
熱のこもった意見交換が行われた。

Photograph: Nanae Suzuki Design: Better Days

美しく生きる。



健康寿命延伸都市・松本

提供 松本市



働いてきた経験からだ。

康寿命延伸都市・松本」について語った。

菅谷 平成16年、私が市長に就任したときの基本理念は「量から質の時代へ」というものでした。

人間長生きすればいいというものではない。その内容、質が問われることになる。これからは「平均寿命」ではなく、健康で自立して暮らすことができる期間、つまり「健康寿命」の時代がきますよ、と言ったんです。

指すべきでしょうね。地方創生という、つい若い世代に目が向きがちですが、これから増えていく高齢者に、きちんと居場所を用意すべきです。

シンポジウム当日、松本市まつもと市民芸術館には、入場を待つ人の長い列ができていた。参加希望者は県内にとどまらず、近隣の富山、岐阜をはじめ、遠くは鹿児島からも申し込みがあったという。シンポジウム第一部は、日本創成会議座長として人口急減による「地方消滅」に警鐘を鳴らした増田寛也氏の基調講演。第二部では、5人のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

「量から質の時代へ」 先の先を読む

第二部のパネルディスカッションでは、まず菅谷市長が「健

併せて、超少子高齢型の人口減少社会が今後急速に進んでいくということも、菅谷市長は予見していた。長年医療者として

増田 高齢者は単に支えられる存在ではない。むしろ知識・経験・能力を持っている高齢者の方たちが、若い人たちを支える側にまわる。そういうことを目

シンポジウム会場の松本市まつもと市民芸術館には、平日にもかかわらず大勢の聴衆が詰めかけた。途中で席を立つ人もなく、地方創生に対する関心の高さがうかがえた





菅谷 昭 すげのや・あきら

1943年千曲市生まれ。信州大学医学部卒業。元同大学助教授。91年からチェルノブイリ原発事故後の医療支援活動に従事。2004年松本市長に就任。現在3期目



増田 寛也 ますだ・ひろや

1951年東京都生まれ。東京大学法学部卒業後、建設省入省。95年から3期にわたり岩手県知事。2007年8月から08年9月まで総務大臣。日本創成会議座長



木俣正剛 きまた・せいこう

1955年京都市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、文藝春秋入社。『週刊文春』編集長、月刊『文藝春秋』編集長、第一編集局長を経て、2015年常務取締役就任

さらに増田氏は「若い夫婦が安心感をもって、この松本で出産、子育てできるようにしなければいけない」と続ける。「若い夫婦にエールを送るために、何か工夫をしなければ」。それを受けて松本商工会議所の井上会頭から発言があった。

井上 総務省で推進しているテレワーク事業。これは情報通信機器等を活用して、時間や場所の制約を受けずに、柔軟に働くことができる就業形態ですが、

総務省の実証事業に、松本商工会議所と横須賀商工会議所の連携モデルが採択されたんです。

出産や子育てで、せっかく勤めていた会社を辞めざるを得なかった女性たちに、在宅でもできる新しい働き方を提案しようというものだ。増田氏も「先導事業として、ぜひ成功させてほしい」とエールを送る。

菅谷 単に雇用の場を創出するだけでは、一過性の居住になっ

てしまう恐れがあります。若者を地域に定着させるためには、行政が文化や芸術の振興、学びの場としての教育的環境の整備に取り組まないといけない。それと、やはり教育が大事ですね。

菅谷市長は「小中学生に、『自分がこの町の担い手である』ということを意識づけしないとけない」と語る。

増田 地方の進学校は、東大とか早慶の合格者数を競っていま

す。優秀な人間は東京の有名大学に進学して、東京の企業に就職する。それが成功モデルだと刷り込まれているんです。そうじゃなくて、地元の高校から地元の大学に進んで、地元の企業で働く。そういうかたちで地域を支えていくということがいかに価値のあることか、それを若い人たちに教えなければいけません。

菅谷 ふるさとリターン（帰郷）教育ですね。



井上 保 いのうえ たもつ

1942年松本市生まれ。立教大学卒業後、株式会社井上に入社。87年代表取締役副社長、99年代表取締役社長に就任。2004年松本商工会議所会頭に就任

松本市では若手職員を集めて「まつもと100年塾」という勉強会を行い、「白書」をまとめ

菅谷 最初に市長に就任したときに「20年、30年先を見すえたまちづくりが必要ですよ」と言いました。今度はさらに100年後の松本の姿を予測して、まちづくりの政策を考えてみたらどうなるだろうと考えました。

行政にもとめられるのは、「生きがいの仕組みづくり」

た。テーマは教育から産業まで幅広い分野に及んだ。

菅谷 100年先でも行政に求められるのは、やはり「生きがいの仕組みづくり」だと思いま

す。もちろん健康寿命の持つ普遍性や重要性は変わらない。わたしは100年後にむけて「信州松本桃源郷構想」というのを温めているんですよ(笑)。

松本市のイメージアンバサダーを務める賀来さんも「頑張っ



賀来千香子 かくちかこ

東京都出身。女子美術大学短期大学部卒業。学生時代からファッション誌などでモデルとして活躍した後、女優デビュー。2014年より松本市イメージアンバサダー

賀来 テレビや新聞を見ていると、毎日悲惨なニュースが多くて胸が痛みます。人を大事に思っ、自分を大事にする。世の中を明るくするって、そんなシンブルなことだと思うんです。わたしも両親からもらった命に感謝して、素敵に寿命を全うしたい。松本に来て、その浄化されたようなクリーンな空気を吸うたびに、そう思います。

て長生きして、桃源郷の松本に住んでみたいと言っ。

最後に、司会を務めた木俣がこう締めくくった。

木俣 作家の曾野綾子さんはこ

んなことを言っておられました。「不幸は、幸福を生む。だが幸福は、幸福を生まない」。敗戦で廃墟と化した日本は不幸のどん底でした。しかし、そこから這い上がるとした時代には目標があり、人々は幸福でした。そして高度成長で満ち足りた時代、そこでは新たな幸福は生みだされませんでした。いつの間にか、カネや地位や物質的な豊かさだけがもてはやされるようになっていたのです。今、その価値観から離れないと、私たちは本当に豊かな暮らしはできないのではないか。みなさんのお話を聞いていて、そう思いました。本日はありがとうございました。